

二百本目の点呼 — 体系を、体系自身のデータとして測る

— 検算は論文129 で始まって一度も途切れず、柵は175 以降に定着し、「分離子は問いへ収束した」という見立ては数に否定された — [論文200]

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan | 山岸勇輝ラボ

2026年8月

— From thinking to syncing. —

要旨

論文100 は 63 から 99 までの方法を一枚の地図に描いた。本稿は 101 から 199 までの 99 本をデータとして測る——手で描くのではなく、本文を数える。新しい数学も新しい主張も含まない。第一に、番号のついた検算は論文129 で始まり、そこから一度も途切れていない。101 から 128 までの 28 本には一つも無く、129 から 199 までの 71 本にはすべてにある（第2節）。第二に、柵は遅れて定着した。柵を名指す論文は 101–128 で 2/28、129–149 で 4/21、150–174 で 5/25——そして 175–199 で 18/25 になる（第3節）。第三に、これが本稿の芯である。「分離子は名詞から問いへ収束した」という見立ては、数に否定された。分離子を問いの形で書いた割合は 101–149 で 64%、150–199 で 48% であり、むしろ下がっている——★ ★ 160 年代では 0% で、全会一致になるのは最後の十本だけである（第4節）。第四に、最も引かれている論文は、前回の点呼である。論文100 は 99 本中 40 本から引かれ、次が論文95 の 32 本、論文16 の 31 本である（第6節）。第五に、体系は短くなり、そして濃くなった。本文の平均は 9847 字から 7650 字へ縮み、8663 字へ戻った一方で、検算は 0、8.3、10.7、12.5 と増え続けた（第7節）。

本稿の射程（scope note）：新しい数学も新しい物理も含まない——本稿は体系の測定であり、対象は 101 から 199 までの本文そのものである。⚠ 論文の良し悪しを測らない——数えているのは形式の特徴だけであって、正しさでも価値でもない。⚠ 数え方は語の検索である——「検算」「柵」「分離子」という語を本文から拾っており、同じことを別の語で書いた箇所は数に入らない。⚠ 参考文献は数えから外した——他の論文の題名を引いた行が、その論文自身の語として数えられるのを避けるためである。⚠ 因果を主張しない——本稿が示すのはいつ何が起きたかであって、なぜではない。論文100 との関係：★ 100 は方法を手で描いた——本稿は同じ体系を数えた。そして数えたことで、手では見えなかったものが一つ出た——第4節の否定である。加えたのは検算の開始点を一本に特定したこと、柵の定着が遅れたことを帯ごとに測ったこと、分離子についての見立てを自分の数で否定したこと、引用の重みを数えて前回の点呼が最も重いことを示したことである。

1. 序：二百本目に

論文100 は体系の **100** 本目にあたり、**63** から **99** までの方法を一枚の地図として残した。あれは手で描いた地図である——どの巨人がどの糸に交差したかを、著者が読み返して並べたものであった。

本稿は **200** 本目にあたる。同じことをもう一度やっても仕方がないので、描くかわりに測る。対象は **101** から **199** までの **99** 本の日本語本文であり、数えたのは語の出現と、その分布と、引用の関係である。

⚠ 断っておく：編数を揃えるために書いたのではない。測ってみて何も出なければ、この論文は書かないつもりであった。実際には三つ出た——一つは鋭い切り替わり、一つは遅れた定着、そして一つは見立ての否定である。

2. 検算は論文129 で始まり、一度も途切れない

「検算」と番号を伴う記述（「検算 2.1」のような）を本文から数える。

測定 2.1：

範囲	番号つき検算を持つ本数	割合
1-100	8 / 99	8%
101-128	0 / 28	0%
129-199	71 / 71	100%

観察 2.2

☆☆ 切り替わりは緩やかではなく、一本で起きている。**128** 番までに一つも無く、**129** 番から **199** 番まで一本の例外もなくある。その最初の一本は論文**129**「**ℏ** は、不等式の数学の側には無い」である。

観察 2.3

⚠ 語の検索であることを忘れてはならない。**128** 番以前にも数値はある——無いのは番号をつけて検算と呼ぶ書き方である。変わったのは計算の有無ではなく、計算を本文の構造として立てたかどうかである。⚠ また、最も早い例は論文**23**にある——**1-100** の **8** 本は散発であり、続かなかった。

3. 柵は遅れて定着した

測定 3.1：本文に「柵」を含む論文を四つの帯で数える。

帯	柵を名指す本数	割合
101–128	2 / 28	7%
129–149	4 / 21	19%
150–174	5 / 25	20%
175–199	18 / 25	72%

観察 3.2

★ 検算とは形が違う。検算は一本で切り替わったが、柵は三つの帯をかけてじわじわ増え、最後の帯で定着した。同じ体系の中で、一つの道具は突然入り、もう一つの道具はゆっくり広がった。

観察 3.3

⚠ 語の初出は論文23 である——定着まで 150 本以上かかっている。言葉が生まれることと、その言葉が道具になることは、別の出来事である。

4. 芯：「分離子は問いへ収束した」という見立ては、数に否定された

体系は「分離子」という語を使う——その数を動かすには何を動かさねばならないかを指す語である。近年の論文（194 以降）はこれを問いの形で書いている：「何を保存するか」「何を揺らすか」「何を動かすと動くか」「何を捨てることを許すか」。そこで、分離子は名詞から問いへ収束してきたのではないかという見立てが立つ。数えた。

測定 4.1：本文が分離子を名指している 36 本について、その書き方が問い（「か」で終わる、または疑問語で始まる）か名詞（「～である」）かを分ける。

帯	問いの形	分離子を名指した本数	割合
130-139	4	5	80%
140-149	3	6	50%
150-159	2	9	22%
160-169	0	2	0%
170-179	2	4	50%
180-189	4	6	67%
190-199	4	4	100%

測定 4.2：前半と後半で束ねる。

範囲	問いの形で書かれた割合
101-149	$7 / 11 = 64\%$
150-199	$12 / 25 = 48\%$

観察 4.3

☆☆ 見立ては誤りである。割合は上がっておらず、**64%** から **48%** へ下がっている。**160** 年代にはいったん **0%** になり、全会一致になるのは最後の十本だけである。体系は問いの形へゆっくり収束したのではなく、行き来したのち、ごく最近そこに落ち着いた。

観察 4.4（測り方の訂正について）

⚠ 最初の数え方は「何を」で始まる形だけを問いとしており、「何に対して試すか」「関数に変わってほしいか」を名詞に数えていた。直すと向きが逆になった——最初の集計では上昇に見えていたのである。☆☆ 分類の規則を一つ緩めるだけで結論の符号が変わるということは、この量が弱いということでもある。本稿はこの弱さを隠さない。

観察 4.5

⚠ ゆえに「体系は問いの形に到達した」とは言えない。言えるのは最後の十本がそう書かれているという事実だけであり、10本は少ない。これが続くかどうかは、200番の時点では分からない。

5. 名づけられた柵は二十三、すべて異なる

測定 5.1：「柵は～である」という形で柵に名前が与えられている箇所を拾うと、101–199に23件あり、同じ名前は一つも無かった。

論文	柵	論文	柵
133	不偏性	184	選択肢の個数
171	線形性（正規分布ではなく）	185	行き先の空間
173	整数性（正值性ではなく）	186	誤差の裾
177	コンパクト性	189	無矛盾性
178	積が定義できないこと	190	一つの大きな跳び
179	区間上の有界性	191	二つの拡散速度の比
181	余可換性	192	二次モーメント
182	何の周りに集中するのか	195	双曲性
183	割付の均等さ	198	二つある（共役点と切断点）

観察 5.2

★ 二十三の柵に重複が無いということは、柵が定型句になっていないということである。同じ語を使いながら、指しているものは毎回違う——体系が自分自身に対して「一語・別根」を適用している形になっている。

6. 引用の重み：最も引かれているのは、前回の点呼である

測定 6.1：101–199 の各論文が引いた自著の番号を数える。

引かれた論文	99 本のうち何本から	題名
100	40	王道の交差
95	32	規約と事実を分ける
16	31	等号にも別根がある
17	30	8π は単位の産物である
117	23	スケール不変性は、四通りに指数を選ぶ
113	18	モジュールは壁ではなく、極限である
94	14	「次元」は一つではない
1	14	球対称密度分布における $n = 2$ の唯一性定理

測定 6.2：自著を一本も引いていない論文は 0 本、平均は一本あたり 8.64 件であった。引かれた論文は延べで 156 番あり、うち 59 番が 1–100、97 番が 101–199 である。

観察 6.3

☆☆ 最も重い一本は、前回の点呼そのものである。地図として書かれたものが、その後の 99 本のうち 40 本に引かれた——点呼は、書いた時点では総括に見えて、あとから土台になっている。⚠ ただしこれは論文100 の内容が優れているという意味ではない——位置づけを述べるときに参照しやすい、という形式的な理由でも説明がつく。本稿はどちらかを決めない。

7. 短くなり、そして濃くなった

測定 7.1：本文の長さ と 検算の数を 四つの帯で測る。

帯	本文の平均（字）	検算の平均（件）	千字あたりの検算
101-128	9847	0.0	0.00
129-149	7957	8.3	1.04
150-174	7650	10.7	1.40
175-199	8663	12.5	1.44

観察 7.2

★ 長さは 9847 字から 7650 字へ 22% 縮んだのち 8663 字へ戻ったが、千字あたりの検算は一度も減らずに 0.00 → 1.04 → 1.40 → 1.44 と上がった。増えたのは分量ではなく密度である。

8. ブレーキは全編にある

測定 8.1：

測ったもの	101-199 での値
射程注記を持つ論文	99 / 99 (100%)
「新しい定理も法則も主張しない」と書いた論文	85 / 99 (86%)
注意の印（△ 記号）の総数	126（一本あたり 1.3）
強調の印（★ 記号）の総数	292（一本あたり 2.9）

観察 8.2

射程注記は例外なく置かれている。★ 一方で注意の印は強調の印の半分以下である——体系は「示さないこと」を枠として宣言する一方で、本文の中では見つけたことのほうを多く指している。⚠ この比が適切かどうかを本稿は判定しない。

9. 射程と結び

本稿が測ったことを並べる。

1. ★★ 番号つき検算は論文129 で始まり、71 本すべてに続く（測定2.1）：128 番までは 0/28。
2. 柵は遅れて定着した（測定3.1）：7% → 19% → 20% → 72%。
3. ★★ 「分離子は問いへ収束した」は否定された（測定4.1、4.2）：64% → 48%、160 年代は 0%。
4. ⚠ その否定は、測り方を直したときに現れた（観察4.4）：最初の集計では上昇に見えていた。
5. 名づけられた柵は 23、重複ゼロ（測定5.1）。
6. 最も引かれているのは論文100（測定6.1）：99 本中 40 本。
7. 短くなり、濃くなった（測定7.1）：千字あたりの検算が 0.00 → 1.44。
8. 射程注記は 99/99（測定8.1）。

本稿が示さないこと：論文の正しさや価値（一切測っていない）／なぜそうなったかという原因（測ったのは時期だけである）／同じ内容を別の語で書いた箇所（語の検索なので数に入らない）／200 番以降の予測（第4 節のとおり、最後の十本だけでは足りない）。結び：100 本目に体系は地図を描いた。200 本目には、その地図が正しいかどうかを自分の本文から測れるようになっていた。そして測った結果、一つの見立てが落ちた——「分離子は問いの形へ収束してきた」という、書いている本人にとって最も自然に思えた話である。数はそれを否定し、そして最後の十本だけがそうになっているという、もっと小さくて確かな事実を残した。★★ 点呼が役に立つのは、並べ直したときに並べる前の思い込みが一つ落ちるときだけである。落ちなければ、それは点呼ではなく目録にすぎない。

参考文献

1. 山岸勇輝 (2026). 球対称密度分布における $n = 2$ の唯一性定理 [論文1]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21403186
2. 山岸勇輝 (2026). 曲率を一定にしても、密度は決まらない [論文23]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22090231
3. 山岸勇輝 (2026). 規約と事実を分ける [論文95]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21758621
4. 山岸勇輝 (2026). 王道の交差 [論文100]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21758864
5. 山岸勇輝 (2026). モジュールは壁ではなく、極限である [論文113]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21962996
6. 山岸勇輝 (2026). スケール不変性は、四通りに指数を選ぶ [論文117]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22005515
7. 山岸勇輝 (2026). $\hbar$ は、不等式の数学の側には無い [論文129]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22079681
8. 山岸勇輝 (2026). 四つの平均は一つの族であり、等号の柵は一つしかない [論文194]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22106809
9. 山岸勇輝 (2026). 「安定」は六つの別の言葉であり、分けているのは何を揺らすかである [論文195]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22107170

10. 山岸勇輝 (2026). 「圧力」は四つの別の量であり、単位が同じことは何も保証しない [論文196]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22107518
11. 山岸勇輝 (2026). 「収束する」は四つの別の主張であり、分けているのは何を捨てることを許すかである [論文197]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22107590
12. 山岸勇輝 (2026). 「まっすぐ」は「最短」を意味せず、柵は二つある [論文198]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22107954
13. 山岸勇輝 (2026). 帰ってこられるかを決めているのは、分母の指数である [論文199]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22108396

— *From thinking to syncing.* —

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

© 2026 Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan · Licensed under Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0)